

山と博物館

第28巻 第3号

1983年3月25日

大町山岳博物館



蒸した桑の皮をばぎ白皮を作る (松崎紙の歴史と技術より)

春を待つ心

ひと頃には比べると、一時間以上も日暮れが遅くなったこの頃、冬の夜空に君臨していたオリオン座も、いつしか西の空にかたより、オトメ、シシなどの春の星座が上ってきている。アメリカインディアン^{ディアン}の神話に伝えられている北斗の大熊も、洞穴から顔を出して北東の空に登ってくる。間もなくこの熊を追うコマドリ・シジュウカラ・シカドリの狩人たちも姿を見せることだろう。ギリシャ神話の大熊・小熊の話よりも、このインディアンに伝えられている北斗七星の物語の方が、夢があり季節に密着したロマンがある。また金星も宵の明星として西の空に輝いている。

「雪とけて村いっばいのこともかな」という一茶の句がある。冬中雪にとじこめられて、テレビもラジオもなかった昔の信濃の子どもたちは、雪どけと共に、待ちわびたように戸外で遊ぶようになる。遊びほれてたそがれの迫る頃、「一番星見つけた。」といって金星を眺め、二番星・三番星としてシリウスやオリオン^{オン}の星などを数えて、家路に着いたことだろう。学校から帰れば、すぐに塾へ行くか、テレビにかじりつく今の子ども達には、この春を待つ心があるだろうか。淋しい事である。よく晴れた早春の鹿島槍や爺ヶ岳など、大町から眺める後立山の連峰は実にすばらしい。冬中に積もった重厚な白雪に覆われたこれらの山の峰々からは、美しいというより、むしろ威圧感すら覚える程である。大町を訪れる人々の中で、春先のこの白銀の山に接し得た人には、終生忘れ得ない思い出として残ることだろう。地元の私たちは、聳立する稜線があかね色の空に鋭いシルエットを刻む時、その上にまたたく宵の明星に、春の訪れを感じとり、やがて間もなく現われる爺ヶ岳や鹿島槍の雪形に、季節の移りを肌で味わうのだが。

(大町東小学校長 川村道男)

表 2

分野	用途	特長	具体的な用途
業務用として	紙用紙 和傘用紙 うちん用紙 教科書用紙 文書用紙		このために相当量出荷された。 洋紙以前はこのたれの需要は多かった。
家庭用として	障子紙 襖紙 襦袢紙 褌紙 大福紙 通宅紙 住ざり紙 さざり紙 ごま紙	座敷用ではなく居間用として、その丈夫さが買われた。 丈夫さと適当なやわらかさがある。 これらのところには質も悪くも利用できな	・特に居間、物置などには喜ばれた。 ・下張り用として、下張りとしてそのまま細く切って使う。 ・松崎紙を店で購入用途に応じて厚さを各人で決めた。 ・板の間をすき間へ大豆を煮た汁などを使って張った農家で藁細工に使った。
養蚕用	蚕座紙 天卵袋紙 繭紙	厚さと大きさが定まった。使った必要あり、張り合わせたり、束ねたり、記名など	・製糸業者などからの注文が多かった。
特殊用	花火用紙 砲弾用紙 風船用紙 パラシュート用紙 飛行機用紙 札用紙	これらの紙は丈夫でさえあればよかった。	・民間の花火業者へ主として空用である。戦時は軍からの注文が多く、納期等がきびしく大変だった。

再出発の方向を求められることになった。というの、今まで通りの和紙を漉いていくか、新しい境地を拓いて活路を見出すかの選択に迫られていた。こうした時も腰原さんとしては、伝統ある松崎和紙を続けたい一つの信念を持って、けれども生計のこと、後継者のことなど信念だけでは解決できない難問にぶつかっていた。これからの難問を解決しようとして腰原さんの探求心はついに一つの活路を見出すのである。

それは松崎和紙の伝統を守りながら、新しい時代の要請に応えられる和紙を作ることである。そして考案したのが「松和紙」である。松和紙とは今までの和紙の原料に松の皮を漉き込むことであった。それによってあの天然の松の色調と感触を出そうとしました。これは見事に成功した。方々に見本として出品したり博覧会などに出し好評を博した。この時の長野県知事、西沢権一郎さんは激賞してくれました。こうした特殊な紙漉に自信を持って腰原さんはこうした面に意欲的に取りかみはじめた。天然の美を伝統の紙の中にと考え「木の葉を漉き込む」ことを考案した。えの木、けや木、もみじなどの天然の木の葉を漉き込むことに熟申し次々と新しい紙を漉いていった。そのためには秋の落葉の季節になるころに漉き込める木のあるところを探し求め山奥まで何回となく足を運んだ。そして集めた木の葉の色をそのまま保つ工夫、それを

第 3 表 最近におけるコウゾ・ミツマタの年次別生産動向

年次	コウゾ		ミツマタ	
	栽培面積 (ha)	黒皮生産量 (t)	栽培面積 (ha)	白皮生産量 (t)
昭25年	3,609	4,898	8,530	3,389
30	3,382	5,292	8,905	3,108
35	3,400	5,020	9,193	2,389
40	2,490	3,170	5,450	1,248
45	1,414	1,760	5,004	1,092
50	701	843	2,112	646
55	446	553	1,159	375

(注) 農林統計 (昭45年以降は農水省畑作振興課調べ)

大正元年 26,238 26,904

[昭和56年農林統計による]

長野県だけでも、いくつもの和紙生産地は残っているが(図1参照)どこも昔の様子とは比べるべくもない有様である。それは和紙が洋紙に圧倒され需要が減ったことがその第一であるが、現在のように工業化され機械化され大量生産時代に和紙のように一枚一枚手漉

三、和紙の原料と周辺機具

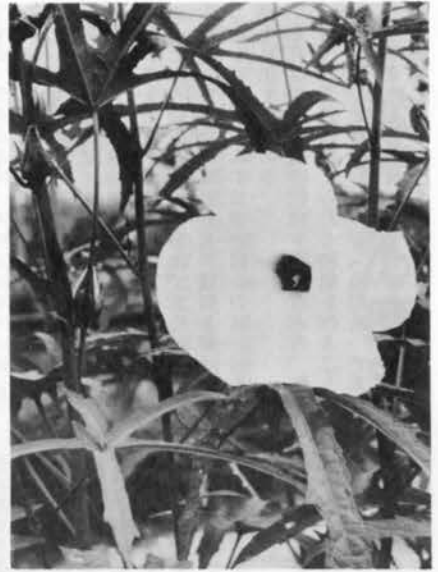
実際に使った紙漉の研究に昼夜をわがたぬ努力を続けてきた。その結果が現在の腰原製紙所を支えている。今は後継者として若い息子さんが精力的に仕事を続けておられる。松崎和紙の伝統が保たれてきたのは一に腰原さん親子三代にわたる情熱のおかげである。つい最近も信州紙漉地の一つである木曾の南木曾町の田立紙が原料の手当難と後継者不足から、徳川時代より続いてきた和紙作りを終止符を打つことになったと新聞は報じた。

表 4 コウゾ・ミツマタの生産状況 (昭56年)

県別	コウゾ		ミツマタ	
	栽培面積 (ha)	黒皮生産量 (t)	栽培面積 (ha)	白皮生産量 (t)
茨城	46.0	95.0	—	—
長野	14.0	28.0	—	—
鳥取	15.5	13.0	14.0	3.0
島根	12.0	17.0	163.9	38.8
岡山	9.0	7.0	241.0	123.2
山口	10.0	10.0	12.0	4.4
知床	190.0	243.0	392.0	106.0
島嶼	—	—	155.0	48.0
愛媛	—	—	107.0	30.8
福岡	39.0	59.0	—	—
熊本	—	9.6	—	—
その他	49.8	81.6	0.3	—
計	385.3	563.2	1,085.2	354.2

(注) 農水省 畑作振興課調べ

とゆうことではその生産性からいって、採算とれるはずがない。かつては原料として楮があり桑皮あり、稲藁まで豊富にあった原料が今では手に入り難くなっている。桑皮は養蚕業がすたれるとともに桑畑など殆ど見られなくなりました。楮にしても自然のものなど少なくなり、たとえあってもその原料を求めるための人件費がかさみ困難となっている。そこで今は殆どが栽培された物を買ってくるのである。その栽培とどこでもあるわけではない限られている。その現状を統計で見ると次の表(3)のようである。参考として大正元年のものを入れてみた。昭和三十五年頃を境に急激に減ってきていることがわかる。工業の発展と同じくこのも興味のあるところである。これを更に府県別に見ると、表(4)のようである。最も生産量の多いのは高知県でこの方面から大部分が移入されている。さてこの原料についても皮ばかりでなく他にいくつもの重要な原材料があるそれは紙の繊維をむすびつけ平面を保つに最も大切な役



ネリの原料となるトロロアオイの花

も使い手であったという条件を具えた人である。何と言ってもむずかしいのは、紙漿を舟からすくい上げる主役である、箕という物なのである。これはこまかい手先の器用さが要求される仕事で誰にでも出来るというものではなかった。もとは竹の節のない部分だけを切り出してきて細い片子を作り一定の長さに揃えて編むのである。編む時は

馬の尾の毛を使って編んだ、昔は大町にも高見町にこの方面の技術者がいてこの地方の需要をまかなっていたが、近頃は殆どを静岡愛知方面から買っていた。この箕は水切れの具合や、粘りとかかわり、繊維のからみ具合などすべての点からみて一番使い易いという。

割を果している「粘り」についてである。粘りはふつう「トロロアオイ」と言う植物の根をすりつぶしそれからとれる粘着力のある液を使っている。経験上これが最も優れているという、ゼニアオイ科に属する一年生の植物でこの地方でもらくに作れる植物である。この他にもこれに代わる物は数多くあつて、昔はいろいろな物を多くの人が使っていたが結局はこのトロロアオイになつてしまつたといわれている。現在は栽培する人が少なくとても需要には追いつかないので主として韓国方面から輸入している。

原料ではないが植物の繊維をほぐすのに使われる物として植物を焼いた草灰とか、木を焼いて灰にした木灰などがあるが現在ではそれらの物に代わつて化学薬品が多用されるようになってきている。しかし和紙本来のよさを出すには化学薬品ではどうしてもうまくいかないと言われています。

原料以外で重要なものは紙漉のための用具のいくつかである。今そのうち重要な物について二、三考察する。一つは漉き舟、二つには漉桁であり三つには箕である。一番困ることはこれらの物を作る職人がいないことである。松崎の腰原福松さんはこの方面の職人であり、自分の考え自分で作ることが出来しか



旧杜小学校の資料室の一部



木の葉を入れた製品(封筒)

近頃は合成物が多くプラスチックなど化学処理したものが使われている。この箕の一本一本の片子の太さ、編み方、寸法などによつて特色ある和紙が漉けるのである。

四、伝統工業と宮本松崎紙

コレクション

伝統工業として大町地区としては貴重なものであるが、このままでは紙漉そのものももちろん、人々の心からさえ消えてしまう恐れを憂い去る昭和三十年代旧杜小学校の五年生が社会科の学習でこのことを実際にやったことがきっかけで、我々の祖先の人たちがやった仕事を忘れないようにしようという声が出た。器具をまず集めようということになり三か年計画ではじめた。PTAの呼びかけで全戸に配布したプリントには「亡びゆく社の紙漉の心と技を後の世に伝え残したい。そのために

今各家にある紙漉用具とか製品などありましたら、寄贈していただき杜小学校の一室に系統的に展示して保存したい。云々」という趣旨のもの配布してお願いしたところ、殆どの家から何かどうかが在るから寄贈しますとの申し出をいただきましたので、学校としては教育委員会の協力を得て全村的に蒐集することになった。その結果あらゆる紙漉用具が集まりその数は数百点にも及びました。それを地区別機能別など考慮して展示し、それに必要を解説とか周辺資料の整備、など手を加えて一室に配置したのが紙漉資料室である。

内容からも資料的価値からも貴重なものであるとの文化財審議会の答伸により大町市文化財にも指定され、将来的には県の文化財の指定も得られるものと期待が寄せられている。(大町東小学校・大町市誌編集委員)

博物館だより

企画展 松崎和紙展

▼期日 4月15日～5月8日

▼会場 山岳博物館・教室

▼観覧者自身による和紙の手漉実習あり

▼手漉和紙行程ビデオ・民芸和紙などと、紙漉用具

▼料金 平常料金

▼企画展 春の草花と山菜展

▼期日 5月15日～5月22日

▼会場 山岳博物館講堂

▼春の野草による生花、食用野草の数々の種類展示

▼料金 平常料金

山と博物館 第28巻 第3号

発行所 長野県大町市 TEL.0261-2111

印刷所 長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部

定価 年額一、二〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野四)一三三九二